

働く女性の“妊活”最新レポート

働く未婚・既婚女性の「妊娠・出産」に対する意識調査アンケート



2014年1月

株式会社アヴァンティ

avanti働く女性研究所事務局

働く女性たちの“産む”をめぐる葛藤と現実

未婚女性の卵子凍結容認、不妊治療の年齢制限…。
今、妊娠・出産を取り巻く環境が新たな局面を迎えています。
そんな中、当事者である女性たちは
“産むこと”を、どう思っているのだろうか？

晩婚化、晩産化も深刻な問題となる今、
福岡女性たちの“妊活”最新事情に迫ります。

1. 調査データ

avanti働く女性研究所

2. 調査対象

福岡県内在住の女性

3. 調査期間

平成25年12月11日～23日

4. 調査方法

avanti働く女性研究所

登録メンバーに対するインターネット調査

5. 調査規模

170サンプル（未婚76・既婚94）

<未婚 N=76>

●年齢

20歳～24歳	5.3%	40歳～44歳	10.5%
25歳～29歳	15.8%	45歳～49歳	2.6%
30歳～34歳	36.8%	50歳以上	2.6%
35歳～39歳	26.3%	100%	

●雇用形態

正社員	63.2%	経営者	2.6%
契約社員	18.4%	フリーランス	2.6%
派遣社員	5.3%	休職中	2.6%
パート・アルバイト	5.3%	100%	

●職種

事務	60.5%	専門職	23.7%
営業	7.9%	管理職	2.6%
販売	0.0%	その他	5.3%
接客	0.0%	100%	

<既婚 N=94>

●年齢

20歳～24歳	0.0%	40歳～44歳	14.9%
25歳～29歳	10.6%	45歳～49歳	4.3%
30歳～34歳	36.2%	50歳以上	8.5%
35歳～39歳	25.5%	100%	

●雇用形態

正社員	53.2%	経営者	2.1%
契約社員	4.3%	フリーランス	4.3%
派遣社員	4.3%	休職中	8.5%
パート・アルバイト	10.6%	(その他12.8%)	100%

●職種

事務	38.3%	専門職	14.9%
営業	4.3%	管理職	10.6%
販売	4.3%	その他	19.1%
接客	8.5%	100%	

●パートナーの年齢

20歳～24歳	0.0%	40歳～44歳	12.8%
25歳～29歳	4.3%	45歳～49歳	6.4%
30歳～34歳	42.6%	50歳以上	12.8%
35歳～39歳	21.3%	100%	

●子どもの有無

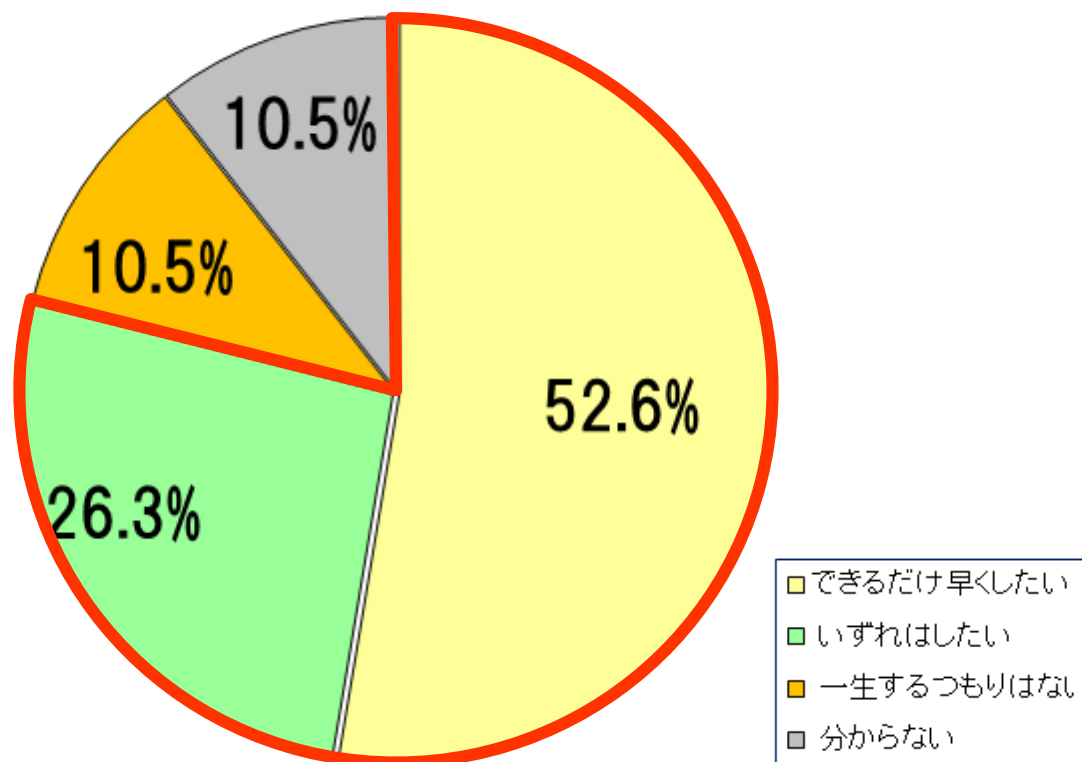
いる	51.1%
いない	48.9%
100%	

1 未婚女性たちの妊活事情

半数を超える未婚女性が、出産を…

Q1. 「妊娠・出産」に対してどう思っていますか？

n=76



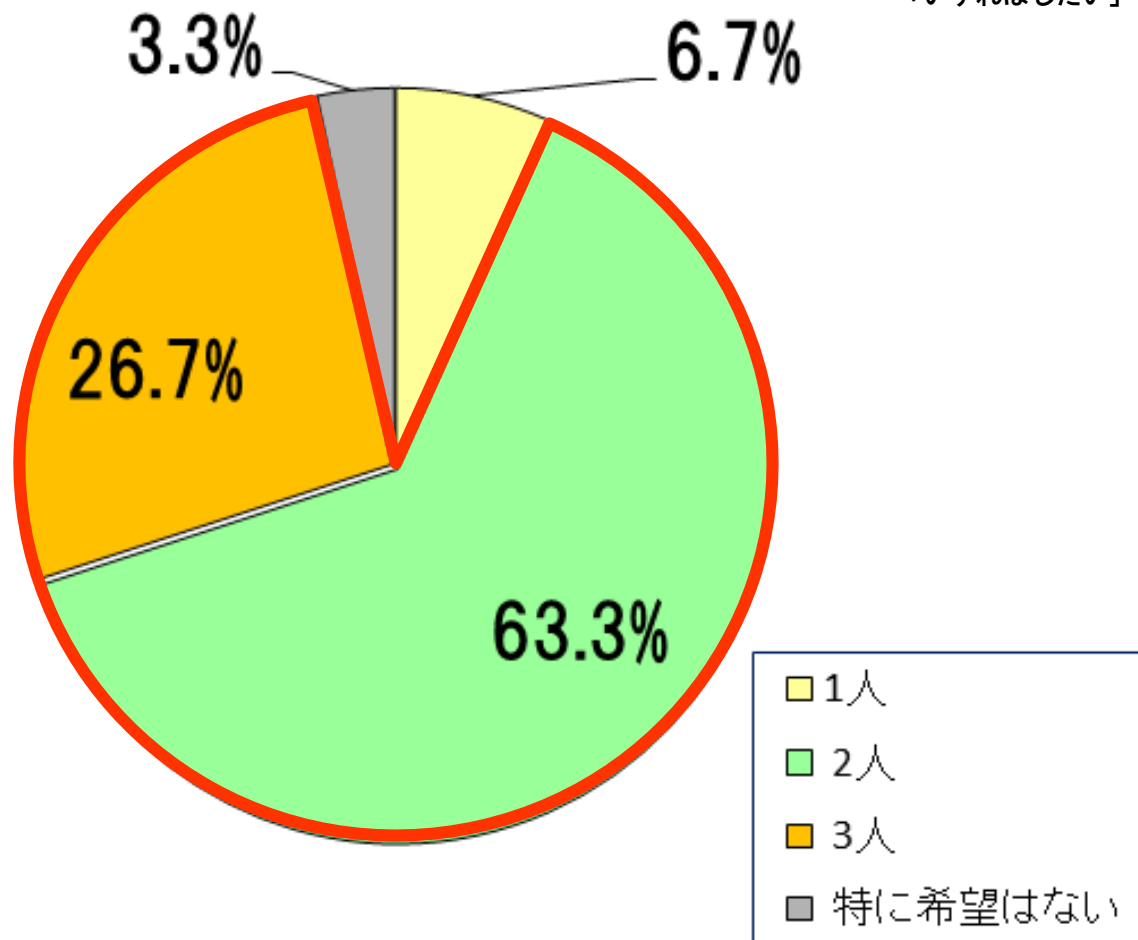
未婚女性の半数を超える52.6%が、妊娠・出産を「できるだけ早くしたい」と回答。「いずれはしたい」の26.3%とあわせると、実に8割ちかい未婚女性たちが「妊娠・出産をしたい」と考えている様子。

子どもは「2人以上ほしい」がスタンダード

Q2. 子どもは何人ほしいとお考えですか？

n=60

※Q1で「できるだけ早くしたい」
「いすれはしたい」と回答した人



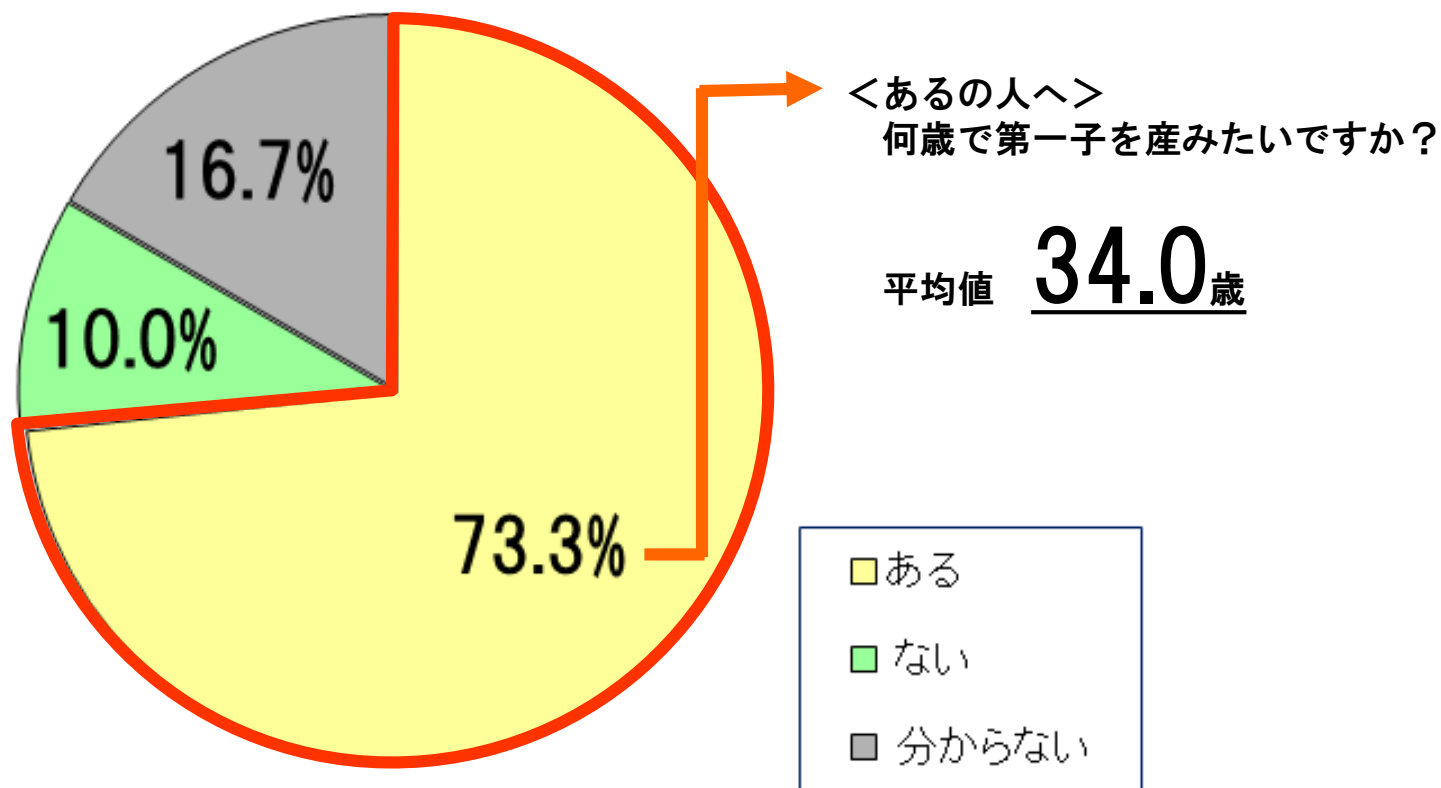
ほしい子どもの数は、「2人」が63.3%、「3人」が26.7%という結果に。子どもは「2人以上ほしい」と考える未婚所女性、実に9割以上いることが明らかに。

晩産化は、未婚女性にも浸透

Q3. 「第1子は00歳までに産みたい」という理想の出産年齢はありますか？

n=60

※Q1で「できるだけ早くしたい」
「いずれはしたい」と回答した人

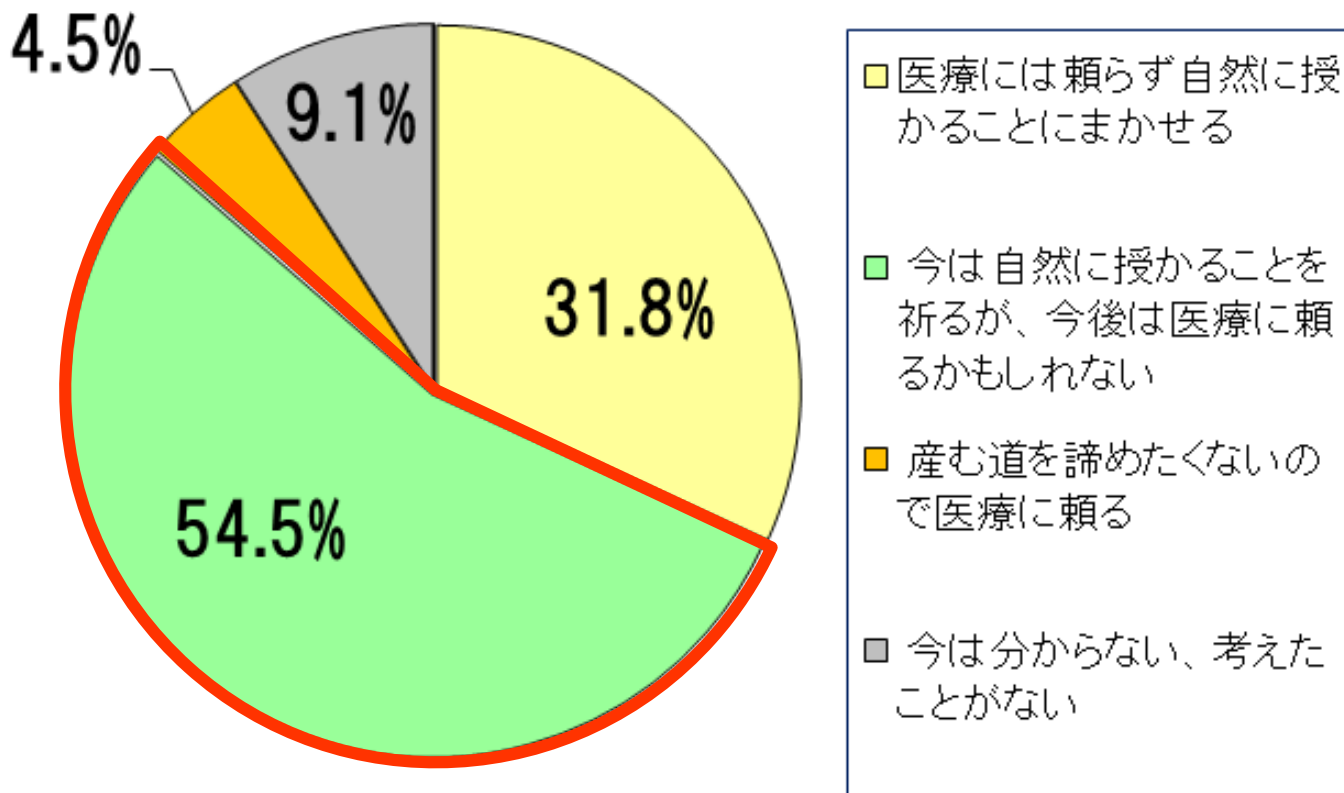


理想の出産年齢が「ある」と回答した女性が7割以上。理想の出産年齢の平均値は34.0歳という結果に。キャリアを積みたい、晩婚化など、様々な要因もあいまって、高齢出産といわれる35歳の一手手前での妊娠・出産を望む未婚女性が多いのが現状か。

医療に頼る可能性も考えている未婚女性

Q4. 理想の出産年齢に近づいた場合、あなたはどんな選択をすると思いますか？ n=60

※Q1で「できるだけ早くしたい」
「いずれはしたい」と回答した人

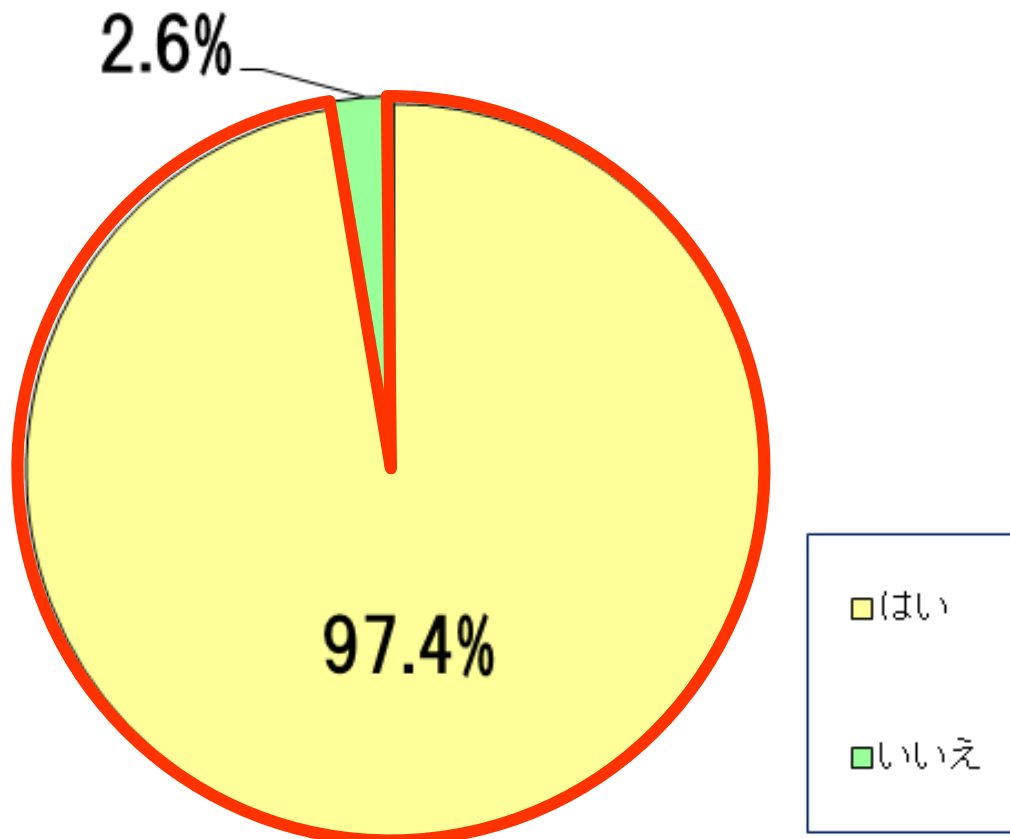


「医療には頼らず自然に授かることをまかせる」が約3割。「今は自然に授かることを祈るが、今後は医療に頼るかもしれない」が最多の約半数。「医療に頼る」は1割にも満たずごくわずかという結果に。できれば自然に授かりたい、でももし授からなかったら…、という女性たちの葛藤が垣間見える。

卵子の老化は、皆知っている

Q5. 年齢を重ねるごとに、妊娠力（卵巣予備能力）が低下することをご存知ですか？

n=76

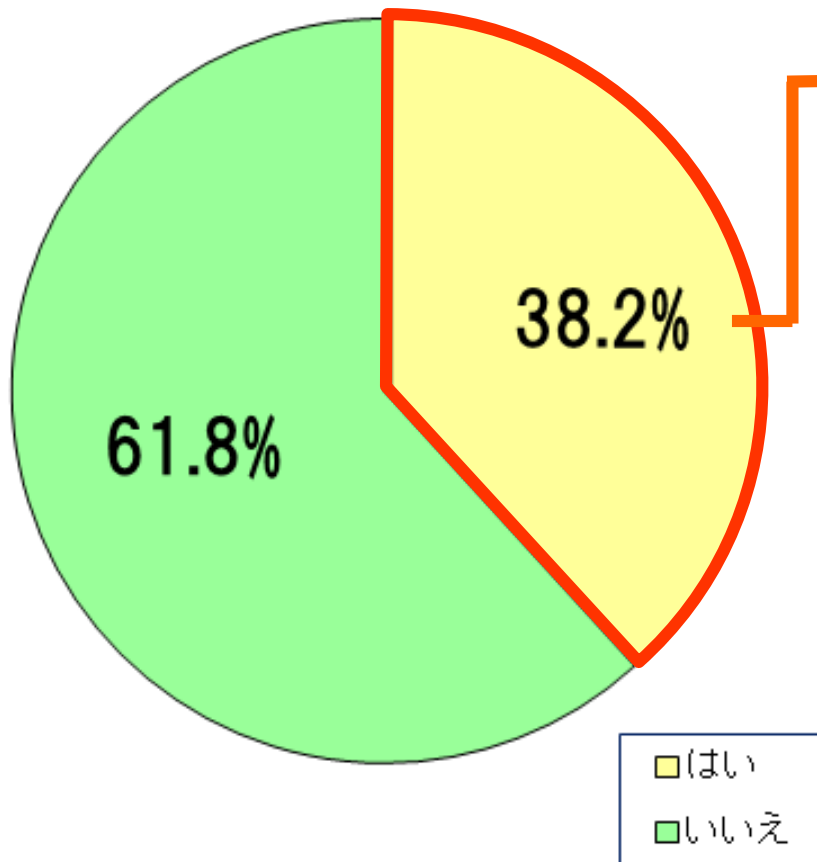


いわゆる「卵子老化」ともいわれる妊娠力の低下についての未婚女性たちの認知度は、ほぼ100%。年齢を重ねるほど妊娠しにくくなる、という知識はすでに浸透しているようだ。

いつか妊娠・出産したいけど、行動に移せていない

Q6. 妊娠・出産などを意識して、日常生活で気をつけていることがありますか？ n=68

※Q1で「できるだけ早くしたい」「いずれはしたい」「分からない」と回答した人



<はいの人へ>
どんなことをしていますか？

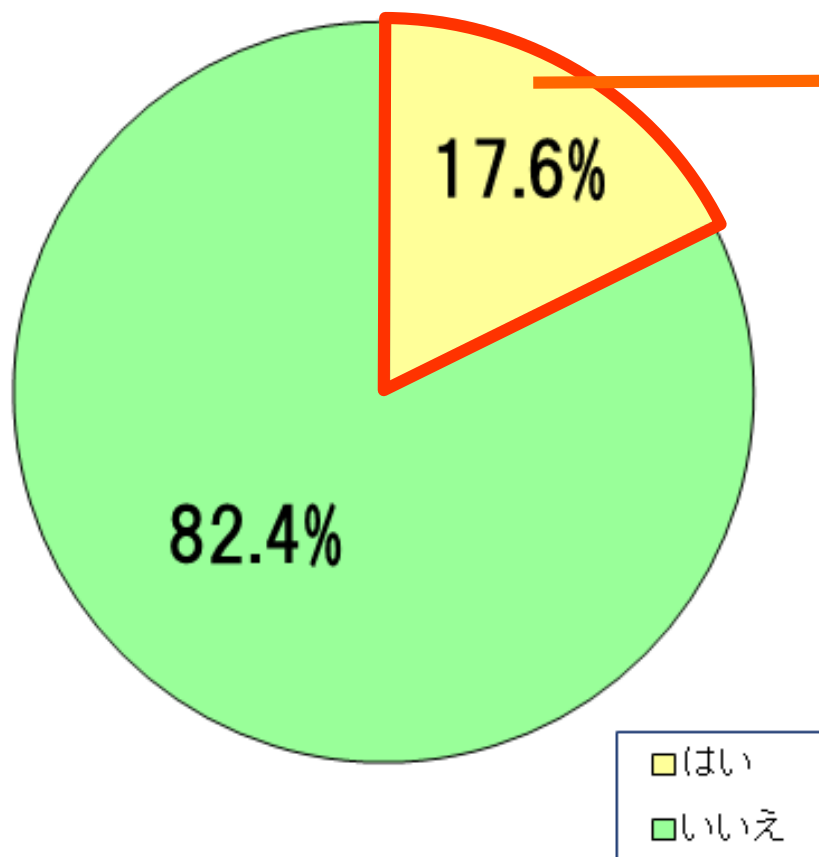
- 基礎体温をつけて、健康のために運動や食事に気をつけています。(30代前半・事務)
- お酒は飲まない。身体を温める食材や健康にいいものを食べるように心がけています。(30代前半・事務)
- ヨガをして体の機能低下を防ぐ。(20代後半・事務)
- 身体を冷やさないよう、服装や食事に気をつけています。(30代後半・専門職)
- できるだけ自炊して栄養バランスを考えている。(40代前半・その他)
- 食べ物など、口にするものに気を遣います。自分が食べたものでしか体は作られないし、強い子を産んであげたいので。(20代後半・営業)

妊娠・出産を意識して、「日常生活で気をつけていることがある」と答えた女性は、4割弱。6割以上の未婚女性が、特に妊娠・出産を意識せずに日常生活を送っていることが判明。「いつかは妊娠・出産したい」と思う女性が多い一方で、実際に“妊活”につながる行動は起こしていないのが未婚女性たちの実情のようだ。

妊活の知識だけでは、行動にはいたらない？

Q7. 妊娠・出産などを意識して、婦人科での検査や治療を受けていますか？ n=68

※Q1で「できるだけ早くしたい」「いずれはしたい」「分からない」と回答した人



<はいの人へ>
どんなことをしていますか？

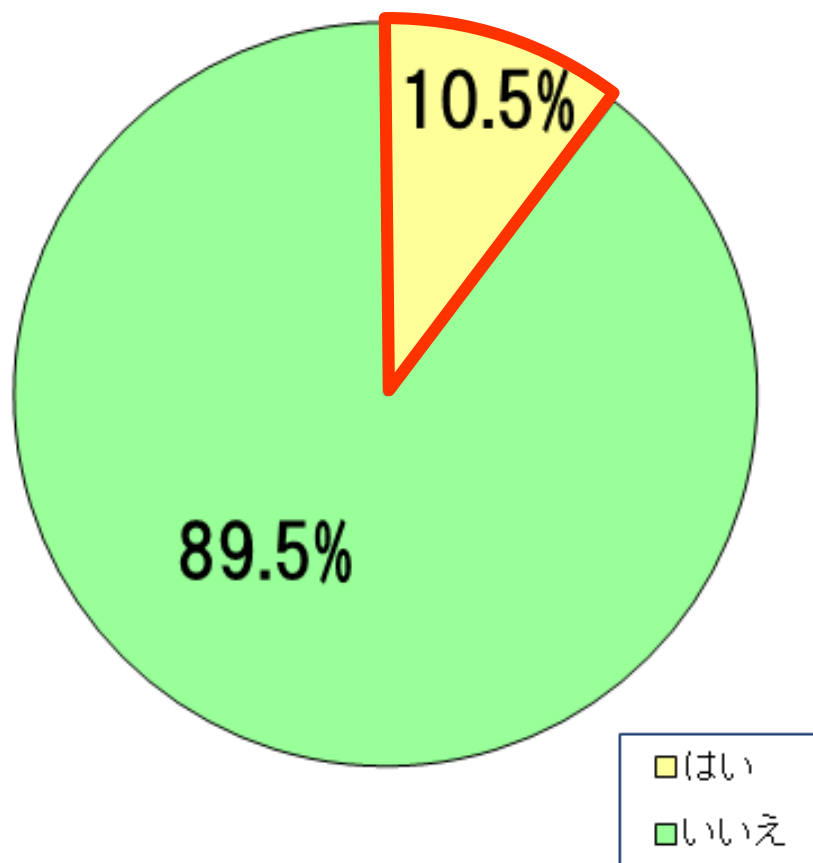
- 子宮筋腫の治療と、良質の卵子のロスを減らすため、ピルで排卵を抑制している。(30代前半・事務)
- 身近な人が子宮の病気になったので、自分も検査に行きました。異常はなかったので安心しました。(20代後半・営業)
- 生理が不規則なため、ピルを服用しています。(30代前半・事務)
- 年に一度の子宮がん検診受診(20代前半・事務)

妊娠・出産を意識して、「婦人科での検査や治療を受けている」と答えた女性は、2割弱。婦人科での具体的・現実的な“妊活”をしている女性は、ごく少数派であることがわかる。「年齢を重ねるほど妊娠力が下がる」という知識はあっても、それが妊活の後押しにはつながっていない現実がみえる。

卵子老化がわかるAMH検査、認知度はわずか1割

Q8. 現在の自分の卵巣予備能力が分かる「AMH検査」という検査をご存知ですか？

n=76

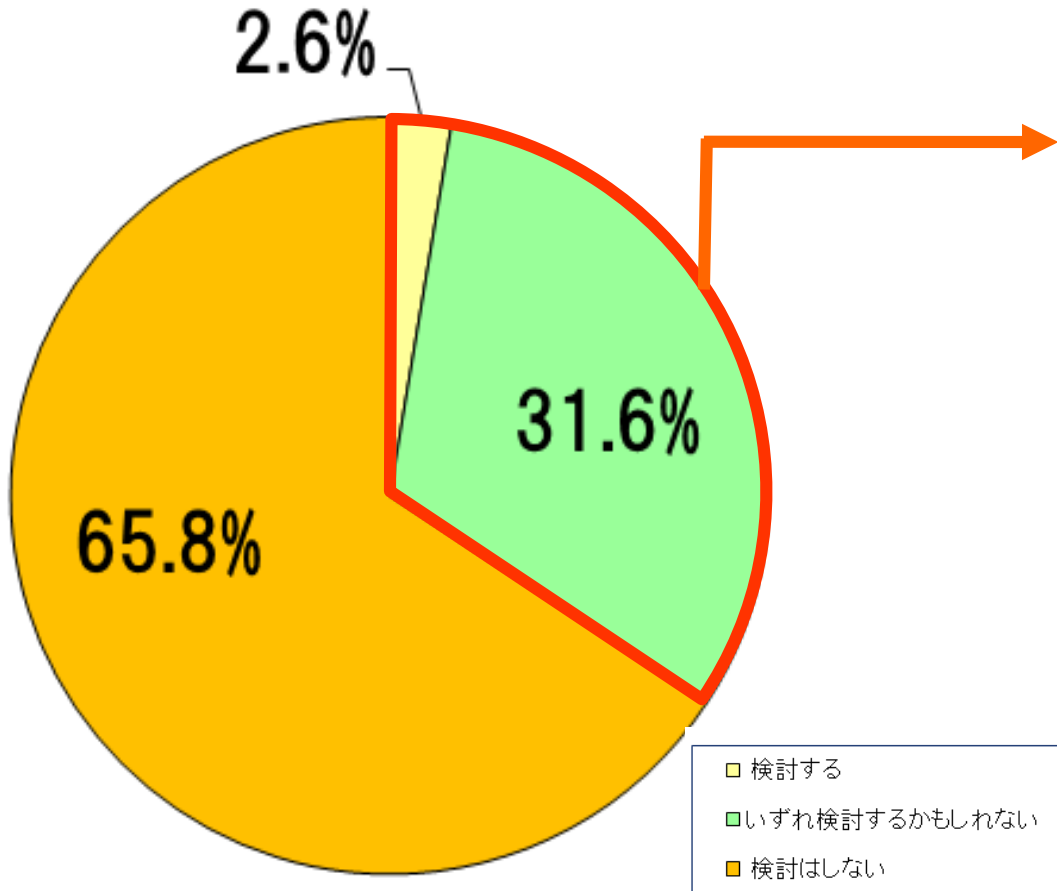


「AMH検査」を知っている未婚女性は、たった1割にとどまる。卵子老化を調べることができると知れば、女性たちの行動に変化が起きる可能性もある。

抵抗感の強い卵子凍結、一方で切実に求める声も

Q9. 未婚女性の卵子凍結を、あなた自身は検討すると思いますか？

n=76



＜「検討する/するかもしれない」の人へ＞
その理由を教えてください。

- いつ結婚できるか見通しが立たないから（30代前半・事務）
- パートナーはいるが、お互いの仕事のタイミングもあり結婚の予定はまだ立たず。お互いの年齢も考えると検討するかも。（30代前半・事務）
- リスクが少ないようなら検討したい。（30代前半・事務）
- 結婚の予定がないが、年齢的にタイムリミットだと思うので。批判はあると思うけど、できる限りのことをしたい。（30代後半・事務）
- 子どもは2人以上どうしてもほしいが、自然に任せては難しい年齢になると思うから。（30代前半・事務）
- 将来どんな選択をするか分からないので、可能性を広くしておくため。（30代前半・専門職）
- あとで後悔するくらいなら凍結しておいたほうがよいと考えるから（20代後半・事務）

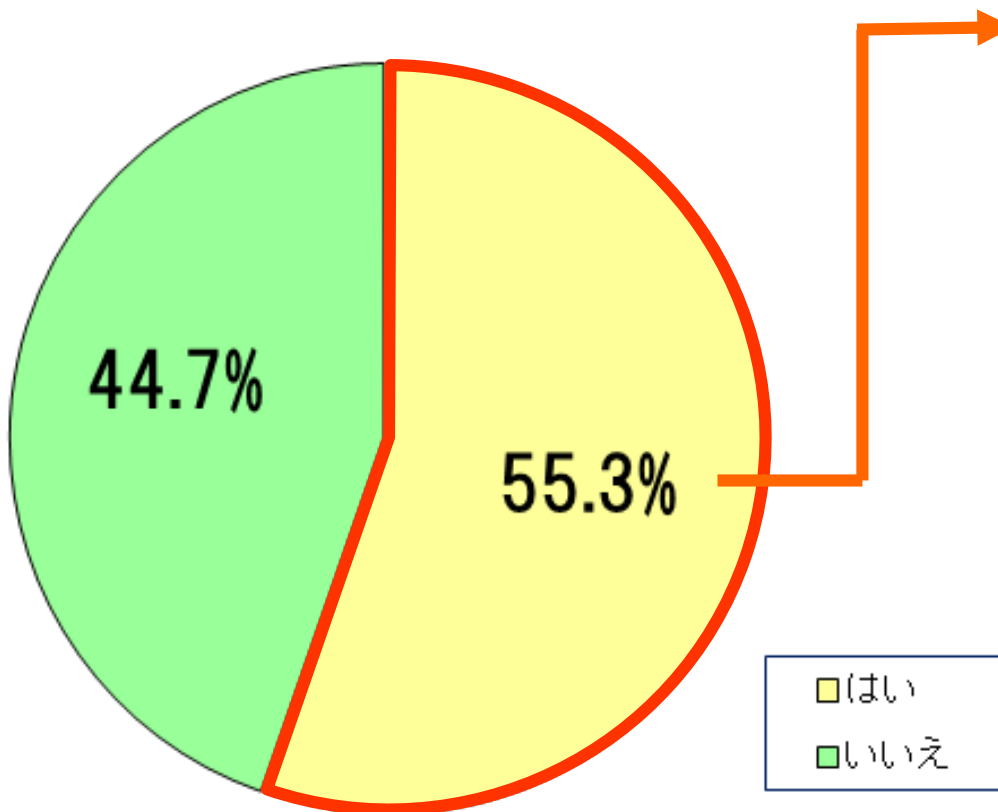
「検討はしない」との回答がおよそ7割を占め、まだまだ卵子凍結への抵抗感が強い様子がうかがえる。一方で、「検討する」「いずれは検討するかもしれない」と答えた女性たちにその理由を尋ねると「結婚の予定はないが子どもはほしいから」「あとで後悔したくない」と、切実な意見がきかれた。晩婚・晩産化が進む今、卵子凍結は子どもを望む未婚女性たちの新たな選択の一つとして、今後定着していくかもしれない。

2 既婚女性たちの妊活事情

半数を超える既婚女性が、「不妊かも？」と不安に

Q1. 今までに、「私は妊娠しにくいのかもかもしれない」と思ったことがありますか？

n=94



<はいの人へ>

そう思ったきっかけは何ですか？

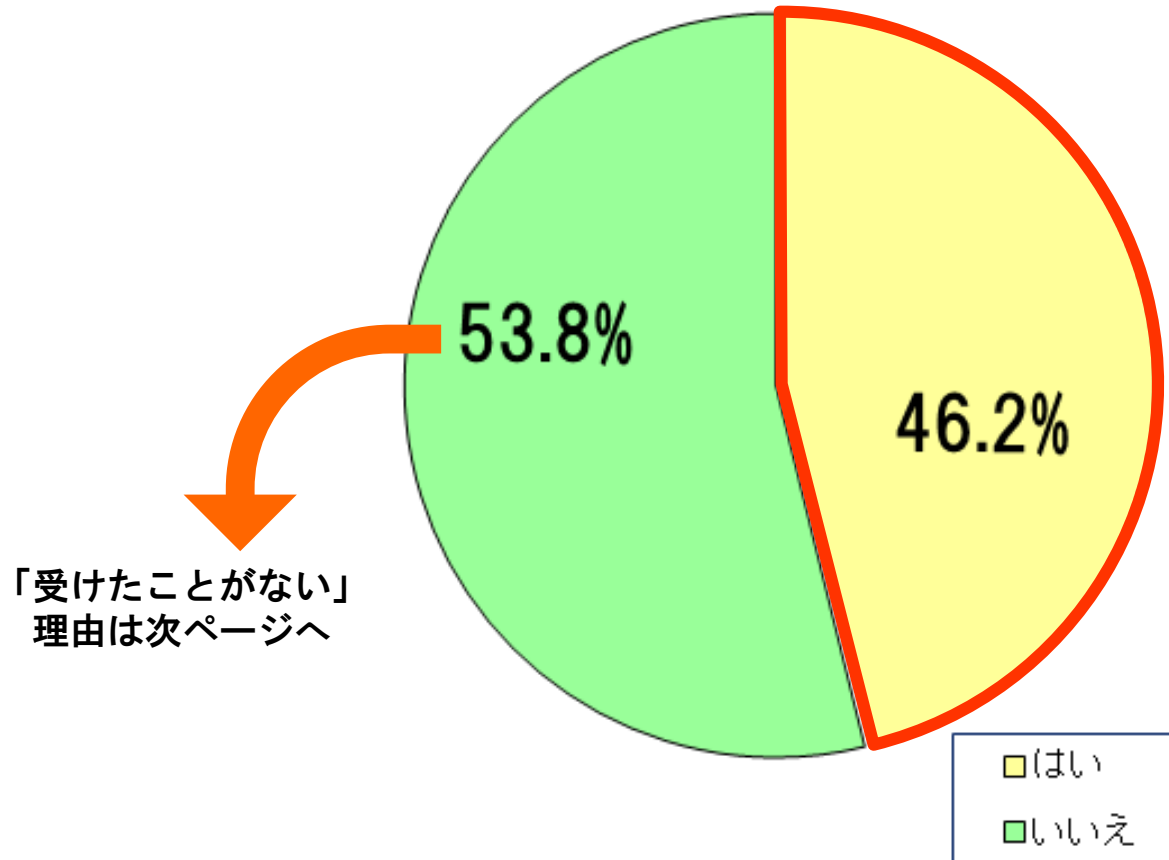
- 結婚前の検診で子宮筋腫があると言われたこともあり、生理不順や生理痛もキツイほうだったので不妊体質かもなあとは思っていたが、やはり子どもを作ろうと思ってから2年経ってもなかなか授からなかった。（妻30代前半・夫30代後半）
- 20代前半から生理痛がひどく、月経困難症を経て、チョコレート嚢腫、子宮筋腫が発見。婚期も30代後半と遅く、結婚前に卵管造影検査をしたりした。（妻30代後半・夫40代前半）
- 一人目出産後、5年間も妊娠できなかったため。（妻30代後半・夫30代後半）
- 結婚したら、すぐに授かるものと思っていたが、なかなか妊娠しないので。（妻40代前半・夫40代前半）
- 結婚して3年目で妊娠したが、初期で流産。その後数回妊娠したが、流産して出産までいかない。（妻30代後半・夫30代後半）
- 二人目がほしくて、基礎体温などつけて周期に合わせて対応したが、結局授からなかったから。（妻30代前半・夫30代前半）

既婚女性の半数を超える55.3%が、「私は妊娠しにくいのかもかもしれないと思ったことがある」と回答。「不妊」に対する不安を抱えている既婚女性が多いことがうかがえる。その理由としては、「生理不順」「生理痛」など婦人科系の不調があることや、「なかなか授からない」「流産経験」など、不妊に対する不安や悩みを抱く女性たちの姿が浮き彫りになった。

不妊治療の経験者は、半数も

Q2. (Q1で「はい」の人へ) 実際に、不妊治療を受けたことがありますか？

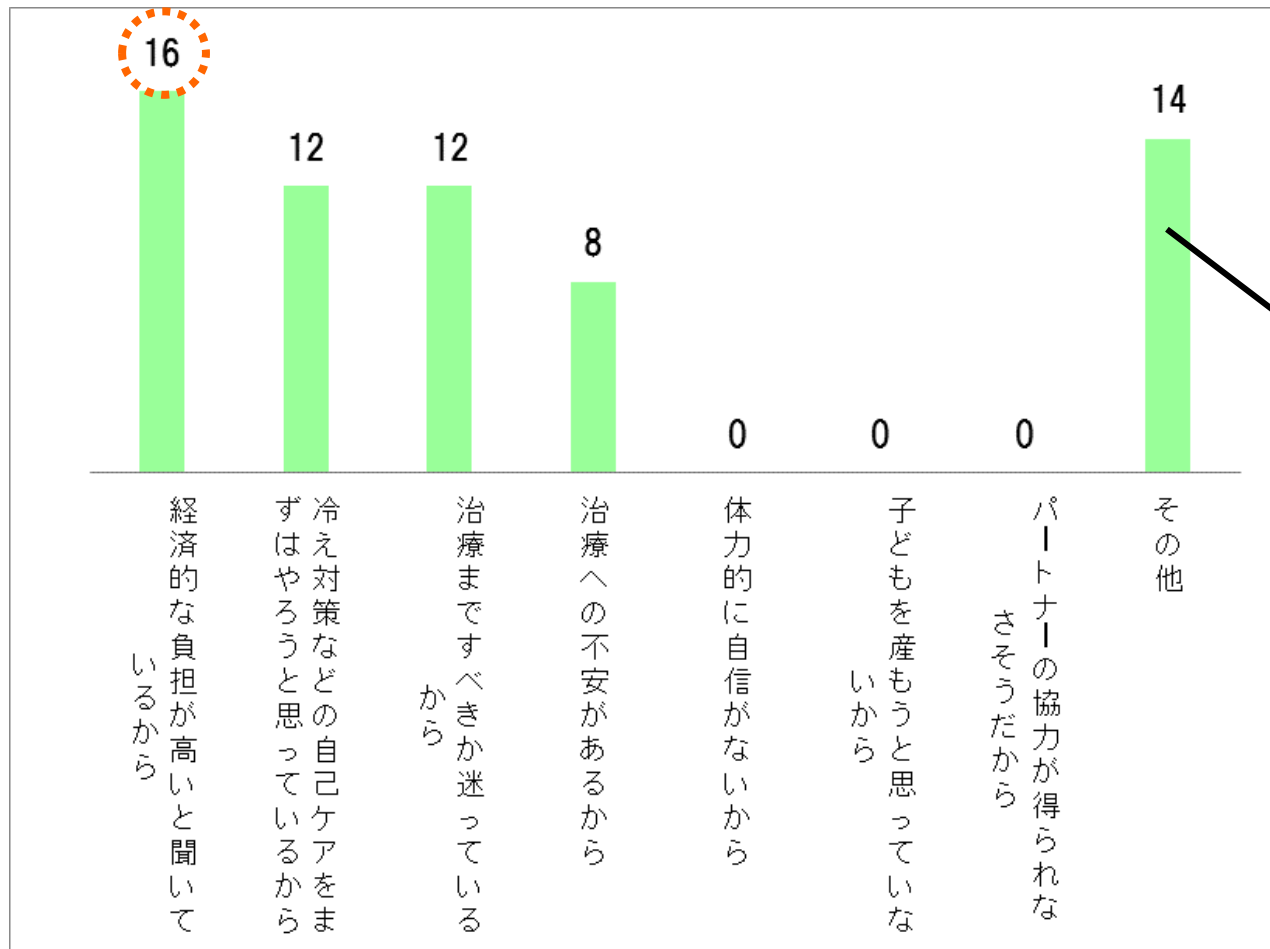
n=52



不妊かもしれないと思ったことのある女性のうち、実際に不妊治療を受けたことが「ある」と回答したのはおよそ半数。不妊を疑う夫婦の約半分が、治療へと踏み切っていることが判明。

受けない理由は、経済的負担と治療への抵抗感か

Q3. (Q2で「いいえ」の人へ) 不妊治療を受けたことがない理由は何ですか？ (複数回答) n=28



＜その他の理由＞

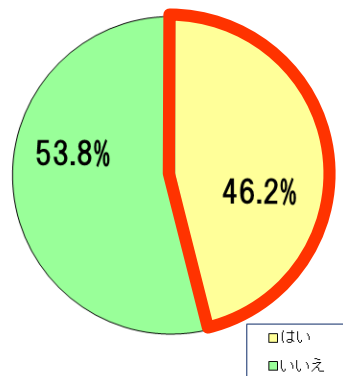
- 治療開始前に妊娠したから。(他多数)
- すでに子どもが一人いるので。
- 自然に任せようと夫婦で決めているので。
- そこまで深刻に考えていないから。
- 子どものいない年配の夫婦をみていて、それでもいいかなと思っている。

不妊に悩んでも、不妊治療を受けたことがない理由の第1位は「経済的な負担が高いと聞いているから」。続いて「自己ケアをまずはやろう」「治療まですべきか迷っている」「治療への不安がある」と続く。経済的負担のイメージと、「治療までは…」という治療に対する迷いや不安が、治療をためらわせる理由か。

治療を始めるのは、35歳を過ぎてから

n=24

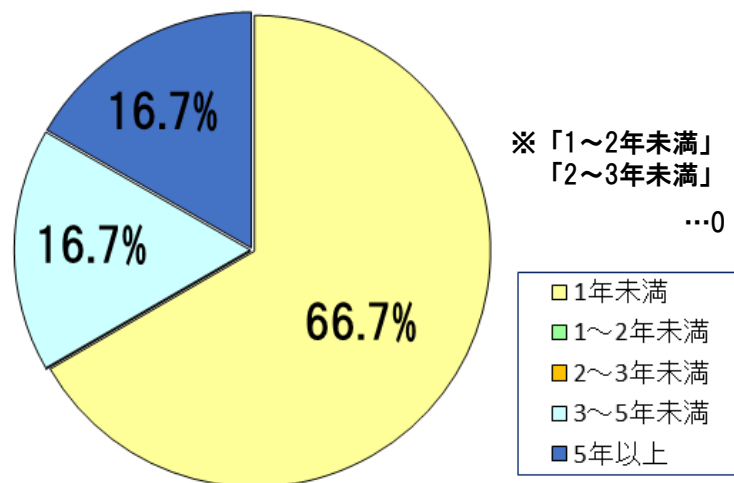
Q2で「はい」の人へ



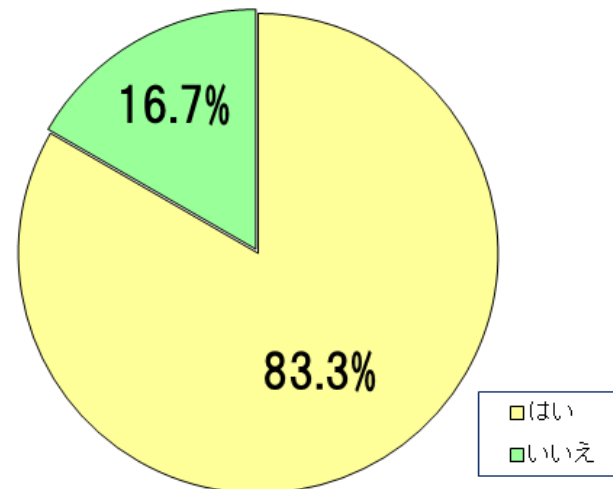
Q4-1. 治療を始めたのは何歳のときですか？

平均値 **35.6**歳

Q4-2. 治療期間はどのくらいでしたか？



Q4-3. パートナーは治療に協力的ですか？



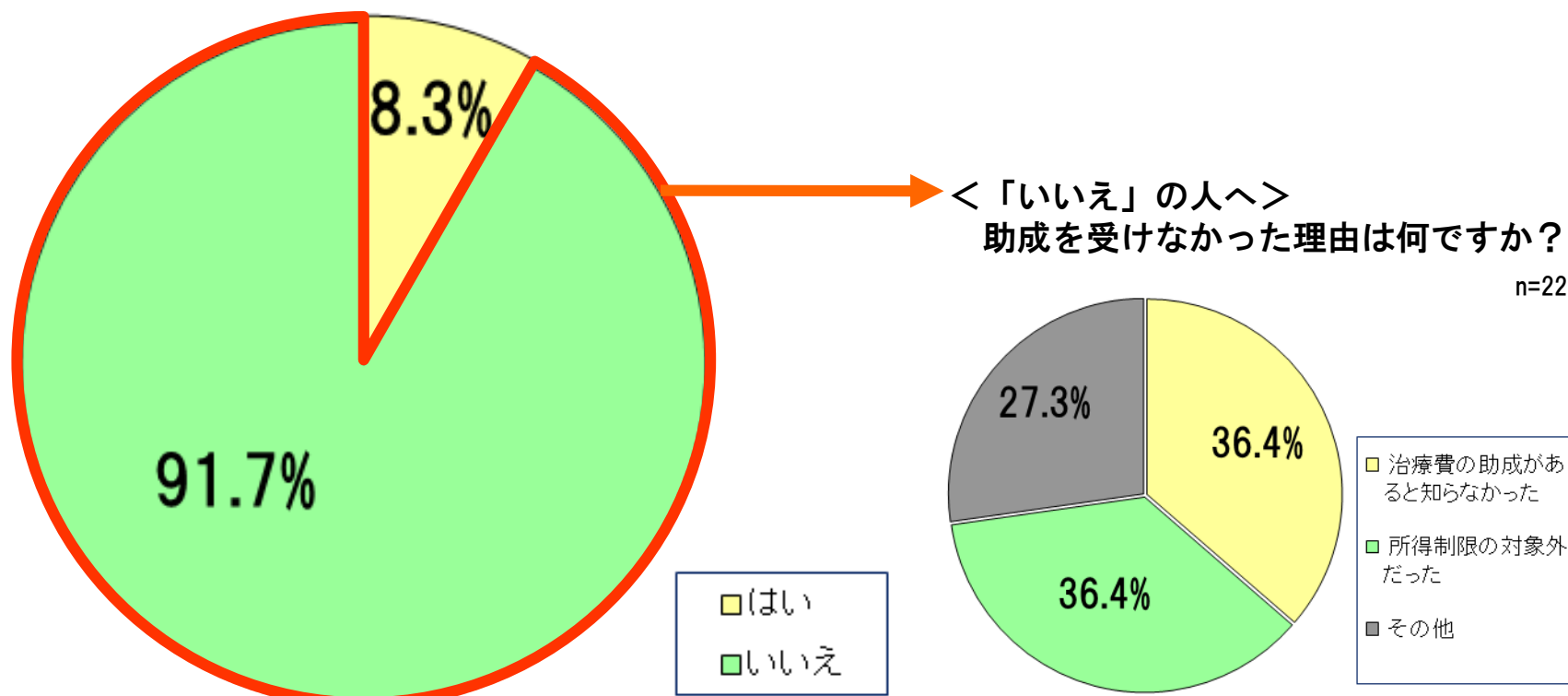
実際に不妊治療を受けたことがある女性の、治療を始めた年齢は、平均35.6歳。35歳を過ぎてから治療を始める女性たちが多いことがうかがえる。

また、治療期間は「1年未満」が約7割、「3~5年未満」「5年以上」がそれぞれ2割弱、と短期と長期の2極化。パートナーが治療に「協力的だ」という回答も8割を超えていた。

治療費助成「知らない」「対象外」。だから受けられない

Q5. (Q2で「はい」の人へ) 治療時に、不妊治療費の助成を受けましたか？

n=24



治療経験者のうち、不妊治療費の助成を「受けた」のは1割に満たないことがわかった。また、治療費の助成を受けなかった人の理由は「助成があると知らなかった」「所得制限の対象外だった」がそれぞれ4割弱という結果に。助成の制度があまり知られていないこと、または知っていたとしても対象外になることが、治療の経済的負担につながっているのではないだろうか。

治療費助成の年齢制限、戸惑う女性たち

Q6. 治療費助成の年齢制限を42歳までとする動きについて、どう思いますか？

n=94

●42歳を過ぎても子どもを産める可能性は十分あるから。
(30代前半・夫30代前半)

●42歳以上で妊娠している人が少数ではあるが、いるから。(妻40代前半・夫30代後半)

●高齢出産は体力的にも危険があり、子育てが落ち着く前に親の介護が始まったりと、いろいろな問題があるので年齢制限があるのは妥当かと思う反面、子どもを授かりたいという想いは年齢に関係なく尊重してほしい。(妻20代後半・夫30代前半)

●現在の女性は選択肢がありすぎて、どれをどこまで選べばいいか迷い、不安に思う人も多いと思う。どんな道を選んでも納得のいく治療や支援が受けられるべきだと思う。(妻30代後半・夫30代後半)

●制限を設けることでのメリットとデメリットがあると思うし、どちらが良いか今のところ決めかねるから。(妻30代後半・夫30代前半)

●42歳が妥当な年齢か分からないから。(妻30代前半・夫30代前半)

●リミットを設けることで、妊娠を先延ばしにするリスクを回避できるから。年齢のリミットがあることで、早めにとりかかろうという契機になると思います。(妻30代後半・夫30代前半)

●不妊治療の区切りをつけるのは本人では難しい問題なので、年齢制限するのは賛成。(妻30代後半・夫30代後半)

●不妊治療の成果、赤ちゃんのリスクや親子の負担を考えると、期限を定めたほうがいいと考えます。ただ、期限を設けることについては、広く周知することや、なぜそうするのかということも、きちんと説明してほしい。(妻30代後半・夫30代後半)

●厳しい意見になるかもしれませんが、現実的に考えると若くして不妊に悩む人に助成金を使うべきだと思うからです。(妻30代前半・夫30代前半)

●医療を使えば子どもがいつでも授かると思っ**てはいけないと思う**。やはり若いうちに自然に妊娠出産するほうが健康な赤ちゃんを授かる可能性が高いと思うから。(妻30代後半・夫30代後半)

反対

17.0%

賛成

44.7%

38.3%

どちらともいえない

治療費助成の年齢制限に関しては、「賛成」が約4割、「反対」が約2割、「どちらともいえない」が約4割という結果に。賛成が最多ではあるが、今のところ判断がつかない女性も多く、意見が割れている様子だ。

【総括1】未婚女性たちの妊活の実態は…

◆半数を超える未婚女性たちが、妊娠・出産をあせっている！

未婚女性の半数を超える52.6%が、妊娠・出産を「できるだけ早くしたい」と回答。「いずれはしたい」とあわせると、実に8割以上の女性たちが「妊娠・出産したい」と考えている。

◆子どもは「2人以上」、理想の出産年齢は「34歳」。できれば自然に授かりたいけれど…。

妊娠・出産を望む未婚女性の9割が「子どもは2人以上ほしい」と考えている。また、理想の出産年齢の平均値は34.0歳。未婚女性の意識にも晩産化が進んでいる様子。また、だからこそ「できれば自然に授かりたい、でももし授からなかったら医療に頼るかも…」という女性たちの本音もみられた。

◆卵子老化は知っている。でも、妊活はまだしていない。

年齢を重ねるほど妊娠しにくくなるという知識の認知度は、ほぼ100%。だが、妊娠・出産を意識して、日常生活を送っている女性は4割、婦人科での検査や治療を受けている女性は2割弱、と少数派であった。「いつかは妊娠・出産したい」と思い、「年齢を重ねるほど妊娠力が下がる」という知識はあっても、実際に“妊活”につながる行動まではなかなか起こせないのが未婚女性たちの現実のようだ。

◆「未婚女性の卵子凍結」。今は抵抗が強くても、今後はニーズ増加？

卵子凍結に関して、「まだ検討はしない」との回答がおよそ7割。卵子凍結への抵抗感はまだ強いようだが、一方で「結婚の予定はないが子どもはほしいから」「あとで後悔したくない」と検討を考える女性も3割にのぼった。晩婚・晩産化が進む今、「いつかは子どもがほしい」「2人はほしい、34歳までには産みたい」「でも具体的な妊活はしていない」という未婚女性の現状がある。だからこそ、卵子凍結は今後、子どもを望む女性たちの選択肢のひとつとして定着していくかもしれない。

【総括2】 既婚女性たちの妊活の実態は…

◆半数を超える既婚女性たちが、不妊に悩んだ経験あり！

既婚女性の半数を超える55.3%が、「不妊」に対する不安を抱えた経験をもつ。

◆不妊に悩み、治療を受けた女性は半数。治療未経験者は、経済的負担と治療への抵抗感が原因で治療に踏み切れない？

不妊かもしれないと思ったことのある女性のうち、不妊治療を受けた経験がある女性は約半数に迫る。一方で、治療を受けたことがない理由は「経済的な負担が高いと聞いているから」。続いて「自己ケアをまずはやろう」「治療まですべきか迷っている」「治療への不安がある」と続く。経済的負担のイメージと、治療にまで踏み切れない抵抗感が、治療をためらわせている。

◆治療は、35歳を過ぎてから。

実際に不妊治療を受けたことがある女性の、治療を始めた年齢は、平均35.6歳。高齢出産といわれる年齢を過ぎてから治療をはじめた女性が多いことがわかる。

◆不妊治療費の助成は、受けなかった女性が9割。

治療経験者のうち、不妊治療費の助成を「受けた」のは1割に満たないことがわかった。助成を受けなかった理由は、助成の制度を知らないことと、または知っていたとしても対象外になること。まずは、助成制度の周知が徹底されること。そして共働きで所得がある程度あっても助成が受けられるようになること。そうして少しでも経済的負担を軽くすることが、治療を受けやすくする方法のひとつかもしれない。

◆「治療費助成の年齢制限」。賛成？反対？戸惑う女性たち。

治療費助成の年齢制限に関しては、「賛成」が約4割、「反対」が約2割、「どちらともいえない」が約4割という結果に。「期限を設けたほうがいい」「若い年齢の不妊に対処すべし」という意見がある一方で、「42歳を過ぎても妊娠はできるから」「42歳までというのが妥当なのか分からない」など、女性たちの間でも意見が分かれている。

いつかは子どもをと望みつつ「卵子老化」の危機を知り、妊娠・出産をあせっている未婚女性は多い。仕事に忙しく、晩婚化も進む今、未婚女性たちの現実的な選択肢の一つとして、卵子凍結が一般化する日も近いかもしれない。

一方で、既婚女性の半数以上が不妊に悩む。経済的負担・抵抗感から治療に踏み切れず、35歳を過ぎてから治療を始める女性も多いようだ。また、治療費助成に関しては、情報の周知不足や所得制限の壁があり、受けていない人が大半だ。子どもを望む女性が、少しでも早く治療へと一歩踏み出すための対策が急務だ。



本件に関するお問合せは、
株式会社アヴァンティ まで

avanti

【データご利用の際のお願い】

データの引用、出版・印刷物への転載に関しては、出典元を「avanti働く女性研究所調べ」と明記していただければ、基本的にご利用いただけます。また、ご使用に際しては必ず下記の「avanti働く女性研究所」窓口までご一報ください。

E-mail : labo@e-avanti.com

TEL : 092-724-3226